



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

熊本県支部

発災から終息までの活動記録

平成28年
熊本地震

KUMAMOTO EARTHQUAKE
CORRESPONDENCE RECORD

震度7が2度も襲った地震は、地震観測史上初であった。
この極限状態で体制を維持し続けた熊本県支部
本社、全国から駆けつけたスタッフの活動の記録である。

本記録誌は、原則として発災日の平成28年4月14日から平成28年7月31日までの事業実績を収録しています。
(数値関係は平成30年2月10日時点)

被災地となった「日赤発祥の地・熊本」

日本における赤十字事業創業の地である熊本で、記録的な大地震と未曾有の被害が発生しました。

熊本は、日本赤十字社の誕生の地です。

日本赤十字社の前身である博愛社は、明治10年の国内最大で最後の内乱であった西南戦争、特に田原坂の激戦をきっかけとして誕生しました。熊本県内には当時を偲ばせる戦跡や、博愛精神で負傷者を治療した寺院などがたくさん存在しています。田原坂や熊本城を中心とした地域を「日赤発祥の地」として、戦争や災害で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、戦争のない平和な世界を願うことができます。



明治10年の西南戦争で、多くの兵士が死傷し、地域住民たちにより懸命な治療や介護が行われる中で、日本赤十字社の前身である博愛社が誕生しました。そのために最も戦闘の激しかった田原坂、吉次峠、熊本城及びその周辺地域は、日本赤十字社の誕生の地とされています。

熊本城に明治政府軍が入城を果たすと、熊本城を包囲していた薩摩軍は益城町の木山城跡地などに本営を移し、明治政府軍と薩摩軍の激戦がこの地域でも繰り広げられました。

田原坂の激しい戦いをきっかけとして、日本赤十字社の前身である博愛社が誕生しました。

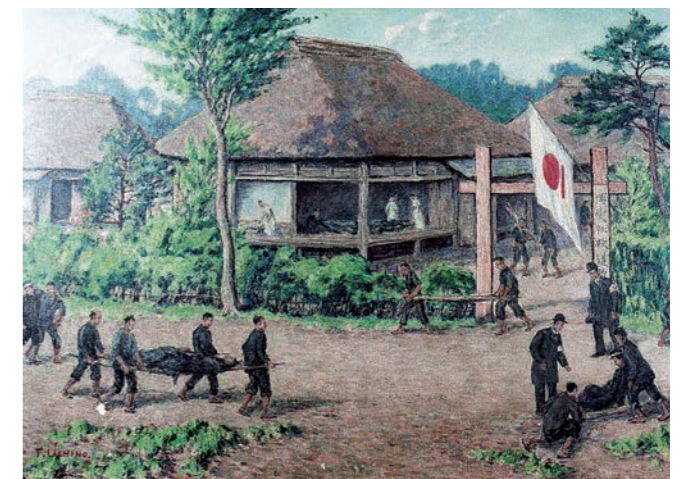


明治10年4月6日に提出された「博愛社設立請願書」及び、明治時代に発行された「日本赤十字社史稿」並びに、「日本赤十字社発達史」には、田原坂や吉次峠の激戦の様子が記載され、博愛社の誕生が説明されています。

西南戦争:明治10年2月15日～9月24日



明治10年5月1日、博愛社設立許可の舞台となったこの建物は、熊本洋学校教師館「ジェーンズ邸」。現在は熊本県立第一高等学校の敷地。



博愛社が最初に救護活動を行った熊本軍団病院。現在は国立病院機構熊本医療センター敷地。その他、人吉、八代、水俣で活動。

震度7が2度襲った益城町



益城町では2階建て家屋の1階部分が損壊した



被害を受けた益城町の中心地



木山神宮



甚大な被害を受けた益城町役場



正面玄関前が地割れした益城町総合体育館

本震では西原村も震度7を記録



崩落した阿蘇大橋



崩落した阿蘇大橋



ペンション(南阿蘇村)



山腹崩落により断裂された国道57号(立野) (提供:阿蘇市地域赤十字奉仕団)



亀裂の入った道路(阿蘇市の石) (提供:阿蘇市)



地割れた兜岩展望所(阿蘇市西小園 北外輪山) (提供:阿蘇市)

被害の大きかった熊本城



奇跡の飯田丸



天守閣の被害も大きかった



戊辰櫓横の石垣は原型をとどめていない



崩落した石垣

熊本地震により失われた日赤記念館ジェーンズ邸



地震以前の日赤記念館 ジェーンズ邸



博愛社創設許可の舞台となった部屋



悲しげに横たわる倒壊したジェーンズ邸

体育館、自家用車、テント等で避難生活を送る被災者



益城町総合体育館



南阿蘇中学校



西原村河原小学校



あそ望の郷くぎの(南阿蘇村)の避難テント



阿蘇熊本空港ホテルエミナース駐車場

多数の患者が押し寄せた熊本赤十字病院



心肺蘇生を行う看護師

熊本県支部に設置された災害対策本部



災害対策本部ミーティングで報告する熊本赤十字病院副院長、看護部長等



ミーティングを終え各被災地へ向かう救護員

発災直後の被災地での救護活動



避難所での診療活動



避難所で脱水症状の処置を受ける子ども



精神的不安に寄り添う

発刊に寄せて



日本赤十字社 社長
近衛忠輝

このたび、先の震災における日本赤十字社の救護活動の記録をまとめるに当たり、改めて亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、未だに困難な生活を強いられている多くの被災者の方々にお見舞いを申し上げます。本震災は、前震、本震の2度にわたって最大震度7を観測し、災害関連死を含めて250人も尊い命が奪われるなど甚大な被害をもたらしました。本震災に対し、日本赤十字社熊本県支部は発災直後から救護班を派遣するなど、直ちに救護活動を開始しました。

また震災当日、震源地に近い熊本赤十字病院は幸い大きな被害を受けず、早速に負傷者の手当に奔走しました。しかし、それが一段落した翌々日の未明、予想だにしなかった本震が襲い、益城町を中心に甚大な被害が発生しました。近くにある熊本市市民病院が被災したため、多数の負傷者が押し寄せ、その対応に迫られました。

熊本県支部、管内施設の多くの職員は自らも被災しながら夜を徹して救護に当たることになりました。当然、広範囲にわたる被災地や避難所での救護に十分な人員を割くゆとりはなく、全国の日赤支部、施設から職員を動員し、救護班による医療救護や熊本赤十字病院の支援のほか、避難所の環境改善、被災者のこころのケアや健康支援等に携わりました。地元の赤十字ボランティアは土地勘のない他都道府県から支援に入った救護班等の道案内に当たり、赤十字奉仕団による炊出し等の様々な活動もありました。3か月に及んだ活動に派遣された職員は延べ約2,300人となり、全社を挙げての取組みとなりました。

こうした総合力を活かした一体的な対応がなされ、それなりの成果を上げられたことを誇りに思う一方、行政や他団体との活動の調整については課題が残り、日赤の独自性を発揮しつつも、いかにより良い協力関係を築いていくかは今後、全社的に検討していかなければなりません。

日赤の救護活動を評価するメルクマールのひとつには、寄せられた義援金の額があると思います。今回平成29年12月31日迄に寄せられたのは287億円、この金額は義援金総額の56%を占めており、日赤への国民の高い信頼を表していると考えます。また過去に批判のあった配分の遅れについては、知事と認識を共有し、受付開始から22日後の5月6日に早くも第一次の配分が行われました。その一部は、被災した大分県の被災者のためにも使われました。加えて海外からも日赤の活動資金として約1億4千万円が寄せられました。

本報告書は、日赤の熊本地震災害での活動の実態を記録することで将来の参考に資するとともに、今後の改善にも役立てようとするものであります。この機会に、救護活動に関われ、また支援して下さった全ての方々に心からの感謝を申し述べ、発刊の挨拶とさせていただきます。



日本赤十字社 熊本県支部長
熊本県知事

蒲島郁夫

平成28年4月14日、午後9時26分に発生した地震(前震)は、熊本地方の深さ11km地点を震源とし、地震の規模を示すマグニチュードは6.5、上益城郡益城町において最大震度7を観測しました。

また、本震となる4月16日午前1時25分に発生した地震は、熊本地方の深さ12km地点を震源とし、マグニチュードは7.3、上益城郡益城町及び阿蘇郡西原村において最大震度7を観測しました。

このように、平成28年熊本地震は、観測史上初めて同一地域において震度7の地震がわずか28時間の間に2度発生し、多くの尊い命と財産を奪うと共に、ピーク時には18万名余の方々が避難生活を余儀なくされました。

今もなお、多くの被災者の方々が仮設住宅での生活を余儀なくされておられますが、生活の面をはじめ様々な分野において、着実に復興の道を歩み始めています。

この熊本地震においては、日本赤十字社は発災直後から、本社をはじめ全国の赤十字関係施設から多くの職員が参集し、総力を挙げて困難な状況を乗り切り、赤十字に課せられた役割を果たすことができたものと思います。

特に、地元の県支部、病院、健康管理センター、血液センターのすべての職員は、赤十字防災ボランティアの皆様とともに「日赤熊本」として一致団結し震災対応に当たったところです。

今回、熊本県支部では、「平成28年熊本地震発災から終息までの活動記録」を編纂いたしました。これは、支部・管下施設・本社・全国から駆け付けた赤十字スタッフ・赤十字ボランティアの方々の活動の記録です。

本書は、単なる活動記録に留めることなく、課題を検証し、今後の災害救護体制の改善へ繋げる趣旨から多くの提言もいただいております。様々な教訓を含んだ記録として伝え残すことを念頭に置きました。

今後の災害に対する備えを検討する際の参考になるものと考えています。

最後に、あらためて被災者の方々にお見舞いを申し上げますとともに、寝食を忘れて救護活動等に従事された全国の日赤職員の皆様、救護活動等を支えていただいたボランティアをはじめとする関係者の皆様に心から感謝の意を表し、発刊のごあいさつといたします。

Contents

はじめに	熊本地震のメカニズムと被害状況	21	熊本市市民病院への支援	81	第5章	こころのケア活動	179	第10章	日赤熊本災害ボランティアセンター	227
	熊本地震の概要	22	熊本県支部災害対策本部への本社各支部からの支援	82		日赤こころのケア対策本部との連携	180		DVC(災害ボランティアセンター)とは	228
	熊本の被害状況	28	日本赤十字社熊本県支部長・蒲島郁夫熊本県知事の視察	83		こころのケア活動体制	182		DVCの活動内容	230
第1章	平成28年熊本地震に対する日本赤十字社の対応	43	塩崎恭久厚生労働大臣の視察	84		こころのケア活動状況	184		あらゆるレベルでの連携とDVC運営について見直しを	233
	日本赤十字社の備え	44	政府現地対策本部長・酒井庸行内閣府大臣 政務官(参議院議員)の視察	85		DPATと日赤こころのケアチームの連携	186		熊本県支部災害ボランティアセンターの支援について	234
	熊本地震に対する体制と活動	48	熊本地震対応にあたる日本赤十字社 社長	86		熊本地震における日赤こころのケア活動	187		赤十字飛行隊活動記録	241
	仮設診療所(dERU)チームを含む210班が活動	50	受付における各救護班の到着報告及び撤収報告	88	第6章	全国赤十字病院からの支援	189	第11章	義援金	247
第2章	前震時の支部・九州ブロック及び 本社の救護体制と災害対策本部の立ち上げ	53	各救護班に対する受援施設としての取り組み	89		人的派遣	190		義援金の受け入れ体制と募集の開始	248
	熊本地震発生後の日本赤十字社の組織	54	石井 正教授の支援	94	第7章	国・県・防災関係機関との連携	195		平成28年 熊本地震義援金配分委員会(熊本・大分) 義援金への対応・セレモニー	250 253
	支部災害対策本部の設置	55	日赤災害医療コーディネーターの役割と活動	98		熊本県災害対策本部との連携	196	第12章	広報活動	255
	熊本県支部災害対策本部の設置	56	支部災害対策本部でのコーディネーター業務	99		県コーディネーターの意見	197		熊本地震災害における本社広報の対応	256
	先遣隊と医療救護班の派遣による初動救護	58	派遣されたコーディネーターの意見	100		全国のドクターヘリの活動	203	第13章	熊本地震に関する総括	263
	前震直後の救援物資の輸送	61	前震時・本震時の支部及び管下施設の参集状況	119		防災関係機関との連携	204		第6ブロック(九州)代表支部所感	264
	第6ブロックの協力	62	管下施設の動き	120		DMAT参集拠点病院としての対応	206		熊本県支部所感	265
	熊本県・熊本市・熊本市消防局への 情報連絡員(リエゾン)の派遣による情報収集	64	第4章 医療救護活動	125	第8章	海外救援金を財源とする事業	209		日本赤十字社の総合的な救護活動の実施と 今後の方向性について	266
第3章	本震時の災害対策本部	67	本社及び九州ブロックとの連携	126		平成28年熊本地震災害にかかる 海外救援金を財源とする事業	210		本社・九州ブロック・熊本県支部の検証結果	267
	平成28年4月16日 本震発生	68	被災地での医療救護活動	136		健康支援事業	211	第14章	資料	279
	本震で被災した熊本県支部職員と 先着した第6ブロック救護班	69	益城町での活動	138		被災地自治体との連携(母子保健支援活動)	212		全ブロック救護班派遣一覧	280
	熊本県支部災害対策本部	70	西原村での活動	148		物資支援事業	216		受付で救護班に配布した資料一覧	284
	日本赤十字社熊本県支部長・ 蒲島郁夫熊本県知事への活動状況報告	73	南阿蘇村での活動	152	第9章	日本赤十字社の救援物資	219		ToDoリスト	287
	支部対策本部の再構築と組織の見直し	74	その他地域での救護活動	156		県内地区分区分及び被災自治体との連携	220		経時記録(クロノロ)	291
	本部要員の組織体制再構築	75	アセスメント活動(避難所・巡回診療)	158		救援物資の配布活動	222	編集後記		302
	災害対策本部の移動	76	全国薬剤師会との連携	159						
	熊本県支部災害対策本部会議	78	熊本地震をきっかけとした新たな救護事業の展開	160						
	熊本県支部・第6ブロック・本社合同調整本部会議	78	DVT活動	162						
	救護班による熊本赤十字病院への支援	79	ICT	164						
			WOC	166						
			WATSAN	168						
			医療救護活動の調整の経過 撤収にむけた動向	170						
			日本赤十字社熊本県支部長・ 蒲島郁夫熊本県知事への活動終了報告	177						